

哲學研究

第九十八號

第九卷
第五册

靈魂觀念の分化について

宇野圓空

一

マライ人やインドネシア人がマライ語のスマンガト、または之と同系の地方語で言ひ表はされる特殊の靈魂觀念を持つて居ることは、さきに龍谷大學論叢第二五四號に寄せた拙稿に、數多の事例を擧げて説明した通りである。而して此スマンガトの觀念が普通の個體的な靈魂ことに死靈の觀念とは全然其種類の異なること、またそれが彼等の間に固有な原始的な靈魂觀念であらうといふことについては、同時に多少の暗示を附加へて置いた。尤も詳しく云へばスマンガトの觀念も處により、物によつて多少區々であつて、時としてはそれが個體的なまた人格的な存存として認め

られることも少くないが、しかも其本來の特質は非人格的な而して余り個性の明かでない普遍的な靈魂である。それでこゝには此種の靈魂觀念が他の靈魂觀念に對して如何なる地位にあるか、又何故にこれが最も原本的のものと思倣されるかを稍詳細に考察して見よう。

他の未開人民に於ても屢々見るやうに、特にインドネシア人には種類の異つた幾つかの靈魂を、ことに人間に於て認める場合が甚だ多い。例へばマラッカ半島のマライ人はスマンガトとニャワとマラトエカ、ミナンカバウのマライ人はスマンゲト、ニャオト、アルアフ等の三つの靈魂を考へ、バタク人はトンデイとベグ、ジャワ人はスマンガトとニャワとスクマ等を區分し、スンダ島から西南諸島モリユツカ諸島に於ても略々此等と同名の二つ又は三つの靈魂觀念がある。セレベス、ハルマヘーラ及びサンギルでも多少其名は異なるが、二三相並んで認められて居る靈魂の内容は大略これと同様である。ボルネオではダヤク人のウリブとブルワ、オロガジュ族のハムバルアンとリアウ、オロドスン族のアミルアとアンディアン等多くは二つの靈魂が認められる。フィリッピンにはタガロク族等のカクトボ又はカトトボとアニトが對立し、バゴボ族其他は二つのギモクドを信じ、マダガスカルのホヴ人はサイナとア

イナとマトアトアとの三つの靈魂を區別して居ると云はれる。

此外インドネシア人の中には三四の靈魂觀念を多少組織的に考へて居る者がある。バタニ洲のマライ人は死靈バヂイ (bat) の外にスマンガト、ロフ、ニャワの三つの靈魂を區別して考へ、(1) ミナンカバウのマライ人は其ニャオトをニャオト・サバナノ (njao sabanano) とニャオト・レハン (njao rehan) との二に分けて、後者をスマンゲトと同一視し、また單なるニャオトは屢々死靈アルアフ (arauh) と認めることもある。(2) バタク人は其靈魂トンデイにトンデイ・シグリマン (tondi siguliman, sipargongom) トンデイ・シアンタハラ (tondi santahara) トンデイ・シホルホル (tondi sichorchor) の三種ありとし、(3) スンダ人は靈魂にル、ンブタン (lembutan) 又はアチ (atji) とユニ (uni) 及びスクマ (sulka) の三つの對立を認めて居る。(4) 北部セレベスのゴロンタロ人は靈魂ニャワに、ニャワ・ルフリドラリ (njawa rochoelali, roh ilahi) ニャワ・ランマニ (njawa rahmanj) ニャワ・ロンニ (nja wa rohani) ニャワ・ジャスマニ (njawa djasmani) の四種の區別がありとする。(5) もとより此等は彼等の間に一般に行はれて居る通俗的な靈魂觀念ではなく、多少の思索を経た特殊の靈魂説であるが、とにかく彼等が同時に幾多の靈魂を認めんとする一般的傾向は此中に現はれてゐる。

なほマライ人特にマラッカ半島のマライ人は影、映像、人形、鳥、生命等七種の靈魂を認めて居ると云はれ、其儀式には七つの靈を呼び、七つの靈に供養するといふやうなことが多い。然しこれは七個の靈魂といふよりも、むしろ同一の靈魂の七様の顯現であつて、靈魂の中心住處を頭、心臓、血液等身體の異つた部分に認めると同じやうな意味に於て、根本觀念はむしろ一種の靈魂に歸着するものと考へられる。(6)

(註) 1 Annandale, *Religion and Magic among the Malays of the Patani States*, 1903, pp. 93-100.

2 Torn, *Het animisme bij den Aïmang-kabauur der Padangsche Bovenlanden* (Bijdragen tot de Taal Land en Volk-enkunde van Nederlandsch Indië, 1890, 5, V) pp. 49, 69.

3 Wilken, *De verspreide Geschriften*, 1912, III, p. 8

4 Wilken, *ibid.*, p. 10; Kruijff, *Het animisme in den Indischen Archipel*, 1906, p. 11.

5 Kruijff, *ibid.*, p. 13

6 Skcat, *Malay Magic*, 1900, p. 50.

かやうな幾多の靈魂觀念が相並んで存在する場合に、第一に我々の注意をひくことは、多くはそこに生靈と死靈との區別のあることである。即ち前者は生命の支持

者又は生命其物として、生きた身體に屬する靈魂であるに對して、後者は身體の死後に殘存して、獨立の存在を保つて居る靈魂である。兩者がどの程度まで肉體と結合し、または分離し得るか、又それらが肉體を離れてどの程度まで獨立の形體を有するかは、場合によつて可なり甚しい差異はあるが、全體として生靈は常に生命と共に終始し、死靈は身體の生命とは獨立に其存を保つところに其特徴がある。例へばマライ人やマヅラ人のマラトエカ、ミナンカバウ人のアルアフまたはニャオト、バタク人のベグ、ニアス人のベク、ジャワ人スンワ人のスクマ、マカサル人のアンジヤ(anda)トラジャ人のアンガ(angga)またはアニト(aitu)、ハルマヘラ人のランギ(wangi)、カヤン・ギャクのブルワ(bua, bruya)、オロガジウ族のリアウ(liau)、オロドスン族のアンディアン(andin)、モルッカ諸島から西南諸島、メンタキ島等のニト(nit)及び海ダヤク人のアント(antu)やフィリッピン特にルスン諸族のアニト(aito)の觀念などは、必ずしも單純な死靈ばかりでなく、時として視靈や又一般の精靈をも含む觀念となつて居るが、とにかく生きた身體と關聯した生靈ではなくして、死後の獨立した靈魂、少くとも死後に存續して特別の生活を有する靈魂である。

尤もこれら死靈の中には、身體の死後に新たに發生するか、または生前から存在し

て死と同時に特に變化したものと、生前の靈魂がそのまま死後に殘存して死靈となるものがある。例へば上記のマラトエカ、アルアフ、ベグまたはベク、アンジャ、アンガ、アンディアン、リアウ、ニト及びアニトの如きは前者であり、ミナンカバウ人のニャオト、カヤン人のブルフ等は後者に屬する。然しインドネシア人の死靈觀念は全體として後者の種類は甚だ稀であつて、死靈は少くとも生前の靈魂が著しい變化をしたものと見られて居る。即ちニャフは身體の死と共にマラトエカとなり、ニト、アンジャとなるのであつて、トンデイがベグとなり、ノン(Noso)がベグとなり、オロガジウ族のハムバルアンがリアウとなり、バゴボ族のギモクドがブソ(Buso)となるのも、皆死に於ける靈魂の變化、換言すれば死靈と生靈との多少明確な區別を示すものである。

かく生靈が身體の死に伴つて死靈となる變化の最も著しい點は、それが第三者の利害に關して中性的な状態から、崇り又は守護の能力あるものとなることであるが、同時にまた其本質に於ても、死靈は生靈よりも一層身體との獨立性が強くなり、其個體的性質、形態觀念が鮮明となり、其活動性並に意識的能力もより多く認められて來る。故に生靈の中には屢々身體から分離して獨立に存在し、多少の個體性と意識力を具へたもの、即ち普通に人格的といはれる靈魂觀念があるけれども、全體として死

靈には此人格觀念が一層明瞭になつて居るのであつて、それは身體を失つた後の特殊の存在として蓋し必然的な性質でなければならぬ。之に反して生靈の方は必ずしも意識的能力や人格を必然の性質としないのであつて、たとひそれが程度の差であるにしても、こゝに兩者を區別して見る多少の理由がある。(1)

(註)1 Read, *The Origin of Man and of his Superstitions*, 1920, pp. 150, 161.

三

かくて死靈の觀念は大體上其獨立性、個體性及び意識力の或程度まで明瞭な所謂人格的な靈魂であるが、これに對して生靈は其人格的といはれるものでも、此等の特徴が比較的鮮明でないのみならず、むしろ反對に、常に肉體に依屬して存在し、種々の物體に普遍共通な力又は質として、意識をも持たないやうな靈魂の觀念が甚だ多いのであつて、特に後者の觀念のひろく行はれて居ることは、インドネシアの特徴とも云ふことが出来る。

そこで我々はまた生靈にも二種の觀念を區別して見る。即ち一は多少身體と自由な關係に在る個體的な靈魂であつて、ジャワ人マヅラ人スンダ人等に於けるスク

マ又はソクマの觀念、ミナハサのトゥンブル族のルンガランガン (runga-rangan) 同じく
 トンテンボアン族のカトトウアン (katotonan) サンギル島人のカクドアン (kakuduan)。
 ルスンのタガロク族のカクトボ (kakutubo) またはカト、ボ (katotobo) 同イバナク族の
 イカラルア (karana) ミンダナオのマンダヤ族のカラロア (kalalao) 及びボルネオのカ
 ヤン人のプルの觀念等は、大體之に屬し、多くは身體の死後にも其まゝ存続し、また
 は何等かの程度に變化して死靈となるを考へられて居る。(1)

之に對してマライ人ジャワ人、西南諸島、モルニツカ諸島及び南部セレベスに於ける
 スマンガトまたは之れと同系の地方語で云ひ表はされた生靈の觀念、バタク人の
 トンデ、メンタキ島人のレガト、ニアス人のノン、ガレロ人のグルミ、オロガジウ人の
 ハムバルアン、カヤン人のウリップ等は、比較的に密接な關係を以て身體に依存し、動植
 物其他の物體に普遍共通な靈魂であつて、意識的人格的性質を有することが稀であ
 る。従つてまたこれらが死後に存続することは殆んど考へられないのであつて、死
 靈とは全然別種の存在と認められることが多い。

勿論以上のやうな生靈の二種の區分は、常に截然と認められるものではなく、イン
 ドネシア人の此等の觀念に關する報告が科學的に十分確實でないから、其性質の判

然としないものが多いのみならず、彼等自身に於ても其觀念の内容は常に動搖し、外
 教の影響等によつて新な説明も附加されるのであるから、決定的に之を區分するこ
 とは困難である。例へば前に擧げたスクマ、カトトウアン等も、本來は第二種の普通
 的な靈魂觀念らしい形跡を屢々現はして居り、クロイトは之を普通の靈魂即ち第一
 種の魂魄又は心靈と稱すべきものよりは、むしろ第二種の靈質 (Joules) に屬するも
 のと見做して居る。(2) 反對にスマンガトの觀念もマライ人等の間には屢々其個體
 的人格的色彩が濃厚に現はれてゐることがあり、バタク人のトンディも先に述べた
 やうに三種に區別して説明せられる時、前の二のトンディは死後に殘存してスマン
 ゴトとなり、他界生活を營むと云はれる。(3)

マライ人ジャワ人マカサル人ブキ人ブル人及びゴロンタロ人等の有するニャワ
 に至つては、時によつて其性質が區々であつて、第一種の心靈に屬すべきか、第二の靈
 質と稱すべきものか、殆んど之を決定するに苦しむのである。ミナンカバウ人が其
 ニャオを二種に分つて、生命、氣息と活力、意識となし、ゴロンタロ人がニャワを靈魂の
 總名として、之に四種の別を立てたことは上に述べたが、要するにこれは少くとも生
 靈觀念の兩種のいづれにも屬し、また、いづれをも含むやうである。

此點に於て二種の生靈の性質を對立的に最もよく表はして居るのは、カヤン人のウリプとブルアとである。ブルワ (burwa) といふ語について、ニウエンホイスは、バハ・ウ・ダヤク人に於てそれは死後に死靈となるどころの一種の生靈トナルワ (on luvva) と對立したものとして居るので、クロイトはむしろ之を第二種の生靈たる靈質と見做さんとして居るが、ニウエンホイス自身はまた之を死後に存續する靈魂として記述し、特にカヤン人については二種の生靈であるマタカナン (mata kanan) とマタキバ (mata kiba) とを總稱してブルワと云ひ、此點では多少報告の明確を缺いて居るやうに思はれる。(4) 然しカヤン人のブルア (bur) とウリプ (urip) についてホーズ及びマクドガルの説明する所によると、前者は死後に存續すべき魂魄 (ghost-soul) であり、後者は生活を支持する生命原理 (vital principle) としての靈魂であつて、兩者はそれぞれ英語の spirit と soul ラテン語の animus と anima キリシヤ語の psyche と pneuma に相當する。(5)

バスチアンは、ハワイ人のウハネオラ (uhane oia) とウハネマケ (uhane make) ペラウ島人のアタベンゲル (atahenge) とアタレプ (atalep) 等をば、それぞれ生命を保持し生命と終始する靈魂と死後に死靈となるべき靈魂との對立として、ギリシア人のテーモス (thymos) とプシキ (psyche) に相當すると云つて居る。(6)

要するにインドネシア人の生靈觀念には、多少の動搖と中間の曖昧な觀念はあるにしても、大體上死後に死靈となつて存続すべき稍個體的な生靈と、生命の根源、支持者として生命を終始するむしろ普遍的な生靈即ち靈質の觀念とが存在すると云はなければならぬ。

(註) 1 Wilken, *op. cit.*, III, pp. 257-258; Kruijt, *op. cit.*, pp. 13, 167; Cole,

The Wild Tribes of Davao District, Mindanao, 1913, p. 177.

2 Kruijt, *op. cit.*, pp. 10-11, 13

3 Wilken, *op. cit.*, III, p. 8

4 Nieuwenhuis, *Quer durch Borneo*, 1904, I, pp. 103-105, 148; Kruijt, *op. cit.*, p. 12

5 Hose and Mc Dougal, *The Pagan Tribes of Borneo*, 1912, II, p. 34.

6 Bastian, *Die mikronesischen Colonien aus ethnologischen Gesichtspunkten*, 1899, pp. 34-35.

四

それで生靈の二種の區別は、死後の殘存死靈への連續と生命の保持、生命と共に消長することゝを各自の根本的特徴として、本質的には個體的な而して身體から稍獨立的な靈魂と、普遍的な存在として身體との關係の一層緊密な靈質の觀念とである。

が、これらは又其能力に於て一は多少其自身の感覺意識を具へ、他はむしろ無感覺な存在と見られ、事實全體として人格的な靈魂と非人格的な靈質との對立を示すのである。従つて兩者は其生命に對する機能に於ても、一は感覺意識理解力等の根源であり、他は呼吸、血行、其他の肉體的活動を興へるものと見做され、二つの生靈が相並んで認められる場合には、それぞれ生命の心理的作用と生理的作用とを分擔することが多いのである。

キルケンはマライ人ジャワ人マヅラ人ブギ人等に於けるスマンガトとニャワの觀念を比較して、前者は理解力意識の意味に於ての靈魂即ち生靈であつて、人間の精神的原理としての心理的靈魂たる感覺的 (sensitivel) なアニムスに當り、後者は氣息生命の本質としての靈魂であつて、人間の動物的本質としての生理的靈魂たる物質的 (vegetativ) なアニマに相當すると云つて居る。(1) もとよりスマンガトとニャワとをかくの如く二種の生靈觀念に配當し得るかどうかは疑問であつて、特にスマンガトは事實上第一の靈質觀念に屬する場合が多いのであるが、然し上に述べたやうな二種の生靈觀念が相並んで行はれて居るやうな場合には、兩者がそれぞれ生命の精神的及び肉體的機能の根源と認められることが少くない。例へばカヤン人のブルワ

とウリブが對立する場合、又上に擧げたキルケンの報告の如く、バハウ人のブルワとトンルワの對立が許されるとすれば、此傾向は事實の上に現はれて居る。なほキルケンはオロガジウ人の生靈ハムバルアンは、死後に死靈リアウとなるものと、カラハン(karahang)として身體に残るものと、二つから成り、一は人間に個性と意識とを與へる靈魂、他は肉體生命の根源としての物質的靈魂だと云つて居る。(2)

然し嚴密に云ふと靈魂の本質が意識的のものであると、無感覺のものであるとは、必ずしもそれが生命に對する機能の精神的であると肉體的であることに關係しない。生命の心理的作用と生理的作用との根源に關する思索が進むならば、生靈觀念が人格的のものであらうと非人格的のものであらうと、またこれら兩者が並び認められやうと、此等の機能は其何れかに附屬せしめられたり、又特に此等の機能の根源として想定された別の靈魂觀念を分化して來るのである。現にインドネシアに於いて上記二種の生靈を二つながら認めるものは餘り多くない。而して第一の人格的な生靈觀念のみを有するものも唯だマライ人やジャワ人に於て時々スマンガトやスマクが多少人格的に考へられる外、極めて稀れであつて、大部分は生靈觀念として第二種の靈質の觀念のみを持つて居る。従つて生命の機能に關する考察が發展しな

い間は、一切の生活作用は其根源を唯一の生靈たる靈質に歸し、靈質は生命の精神的及び肉體的の機能を兩ながら代表する。蓋しバタク人のトンディ、メンタキ人のレガト、西南諸島及びモリュツカ諸島のスマンゲン等、及びオロガシウ族のハムバルアン、オロドスン族のアミルアは此種の靈質觀念に屬するものであらう。

(註) 1 Wilken, op. cit., III, p. 10.

2 Ibid., III, p. 9.

五

然し生命の機能に關する考察が進歩して、其心理的及び生理的方面の多少異つたことが注意されるやうになると、此等の機能の根源としての特殊の靈魂觀念が分化して、靈質觀念と對立するやうになる。こゝに於て我々は別種の生靈として精神及び精氣ともいふべき靈魂觀念の發生を見るのであつて、此等は未開人の間では單なる心意や生理的力といふよりも、むしろ此等を支配する特殊の靈魂と考へられて居る。然し生靈として靈質の外に精神と精氣とが別々に認められたり、靈質が單に生命の肉體的機能のみを有して、特殊の生靈としての精神と對立することは、事實上殆

んぞ現はれてゐないのであつて、少くともインドチニアに於ては我々は此種の事例を見出すことが困難である。先に擧げたバタニ州のマライ人の三種の生靈觀念に於て、自我であり自覺であるロフは一見こゝに云ふ精神のやうであるが、實は特に人間のみの有する靈魂であつて、ニャワとスマンガトの一層根本的な靈性として、後に附加されたものらしい。ミナンカバウ人はニャオを二種に分つて、生命氣息としてのニャオサバナオと、生力意識としてのニャオレハンとを認めるが、後者をば常にスマンガトと同一視することは前に説いた通りである。故に事實上他に人格的な生靈觀念のない限り、インドチニアに於ける靈質の觀念は殆んど大部分生命の精神的方面を代表して、其生理的肉體的方面を代表する精氣の觀念と對立して居るのである。

それでマライ人ジャワ人マヅラ人ブギ人等に於けるスマンガトとニャワの觀念が、キルケンの云ふ如く本質上アニムスとアニマとの關係に相當するといふことは、多少説明の精確を缺くのであつて、スマンガトはむしろ多くの場合第一種の人格的生靈よりは靈質の觀念であるが、かくしてなほそれが精氣觀念としてのニャワと對立し、それぞれ生命の精神的及び肉體的機能の根源と認められて居ることは、事實の

真相をうがつて居ると云つていふ。この意味に於ての二つの生靈觀念の對立、即ち生命の精神的作用を代表する靈質と其肉體的方面を支持する精氣とを併せ認めることは、インドネシアの可なり多くの部分に見出される靈魂觀念である。ニアス人は普通に生靈をノソ(noso)と呼ぶので、クロイトは之を一の靈質觀念と見て居るが、然し彼等は一方でマライ人等と同じく靈質スマング(sungge)を認めて居るので、ノソはむしろ氣息と結びつけた精氣の觀念である。これと同系語である中部セレベスのトラジャ人のイノサ(inosa)も同じ關係に於て其靈質タノアナ(tanana)と對立するのであらう。(i) ハルマヘーラのガレロ人、トベロ人はグルミ又はグルミニと稱する靈質觀念を有つて居ると同時に、ニャワの觀念もまた一般は行はれてゐる。(c)

それで靈質觀念と對立した一種の靈魂としての精氣の觀念は、インドネシアに於て可なり廣く分布してゐるのであつて、それは殆んどみな氣息の觀念を基本として居る。而して靈質がスマンガト等の語で代表されて居るやうに精氣はニャワ等の語で云ひ表はされる。ニャワも時としては靈質又は人格的生靈の如く見做されること、またそれが死靈をも含めて一般に靈魂を意味することは、前に擧げたミナンカバウ人やゴロンタロ人の場合の如くではあるが、然し一般的にはスマンガト等の靈

質と相並んで、氣息を本源とする精氣と認められて居ることは否定されない。

かくてインドチシア人の靈魂觀念を主として概念上から區分するならば、死靈と人格的生靈と靈質と、及び此等と獨立に認められた一種の靈魂としての心理的精神的生靈と物質的肉體精氣の五種類を認めることが出来る。而して實際に於て之に關する今日までの報告は、インドチシア人の或る靈魂觀念が、此等の中にいづれに屬するか、また其中の幾つを包括するかを、確實に斷言し得るまでに精密ではない。然し大體に於て心理的生靈としての精神の觀念は、多少の思索を経た靈魂說に於ける外、通俗的には殆んど全く行ばれず、人格的生靈の觀念も比較的稀れであつて、靈質と相並んで精氣觀念の認められることが多く、これに對して死靈觀念が最も一般的に現はれて居ることは確言し得るのである。而して死靈を云ひ表はず代表語がニト、アニトであり、精氣がニヤワの語で代表されて居るやうに、スマンガト系統の語は時として人格的生靈の觀念ともなるが靈質觀念の大部分を代表して居ることは疑はれない。

(註) I Chatehn, Gedsdienst en bijeloof der Nissers (Tijdschrift voor Indische Taal, Land- en Volke Kunde, XXVI)

1881, pp. 133-142; Kruij, op. cit. pp. 10, 168.

Van Barreda, Fabelen, verhalen en overleveringen der Galtjarzenen, (Bijdragen tot de Taal-, Land en Volkenkunde van Nedcrlandsch-Indië, 6, 1) 1896

六

さてインドネシア人の有つて居る重なる靈魂觀念、即ち死靈と靈質と精氣との中で、我々は靈質觀念が彼等に最も原本的なものであつて、他はそれから發展若しくは派生したものと考へるのであるが、たとひ嚴密な發生的意味に於て靈質を唯一の起源と云はないまでも、この觀念が彼等に固有な又最も原始的なものと見做さなければならぬ。其理由については上に此等の觀念の種別を論した中に多少これを説明したが、今一度これを纏めて見ると、第一は觀念分布の範圍から見て、靈質觀念が最も一般的に行はれて居るといふ事實である。

精氣觀念はマラッカ半島のマライ人の一部から、ミナンカバウ人ニアス人ジャワ人ブル島人、セレベスではマカサル人ブキ人トラジャ人ゴロンタロ人及びバルマヘーラ一帯に行はれて居るが、此中大部分を占めて居るニャワの觀念は屢々人格的生靈觀念に變化し、時としては死靈となつて居ることは既に詳説した。人格的な生靈

觀念に至つては、インドネシア人中之を有するもの極めて稀であつて、マライ人ジャワ人等に於てスマンガトが多少擬人化されて居る場合、ジャワ人やスンダ人に於けるスクマの觀念が人格的生靈と見做される外、ミナハサ人サンギル人、フィリップン人の一部の生靈觀念が稍これに近いものと認められるに過ぎない。之に反して靈質觀念はインドネシアの殆んど全部に行はれ、唯だマライ人に於て往々擬人化の傾向があること、フィリップンに於てそれが明瞭に認められないことを除いては、これが彼等に最も一般的な靈魂觀念となつて居る。

一方で死靈觀念は其分布から云つて、靈質のそれに優るとも劣らないのであつて、インドネシア人中死靈觀念を有しないものは、これに關する記録を缺くものゝ外殆んどないといつてもいゝのである。然し之を其内容に立入つて考へると、彼等の死靈觀念は靈質に於けるほど一様でなく種族によつて區々であつて、外部からの移入と認められるものが多く、ことにマライ人、ミナンカバウ人、ジャワ人、マヅラ人、スンダ人等の死靈觀念は全く印度教又は回教の觀念の變形であることが疑はれない。たゞニト又はアニトの觀念はスマトラの一部、ティモル、ロテイ、スンバの諸島、ブルアンボン、セラム諸島から、ボルネオの一部、フィリップンの大部分まで擴つて居るが、それ

でも靈質としてのスマンガトのさらに一般的なものには及ばない。此點から云つても靈質觀念がインドネシア人に固有のものであつたことが想像される。尤も單に分布の廣いことが、必しも直に其觀念の彼等に固有であつたことを證據立るものではないが、然しインドネシアの如く印度教、佛教、回教、キリスト教と次々に外來の大宗教の感化があつた土地に於て、現今に至るまで靈質觀念が力強く一般に行はれ居ることは、それが彼等に特有な靈魂觀念として、本來民族的に共通な原始的觀念であつたことを意味するのである。

そこで更にこれを分布の内容から見ると、靈質觀念は文化の進んだ純マライ人や外教の影響を受けたものに少く、原始マライ人と云はれる狹義のインドネシア人、ことに高等宗教の感化を蒙らないものに多く見出される。精氣觀念を有する人民が主としてマライ人ジャワ人其他印度教の影響のあつた地方に限られてゐることは、先に云つたが、ニャワの語が梵語(॥*Dravida*॥)から來たものとすれば、(1)此觀必が主として外來の觀念、若しくは其影響を受けた比較的後代の發生に屬することが首肯される。スクマやスマンガトの擬人化が多くマライ人、ジャワ人等印度教回教を奉じた文化人民の間に限ることは、既に幾度か之を繰返したが、靈質觀念は外來思想に觸れない

未開人民の間に比較的純粹な形式で保存されてゐるのであつて、スマンガトの語源を梵語に在ると想定しても、それはマラヨポリネシア語系の成形前の要素と認めねばならぬ位、早く民族化されて、それから多くの地方的語形を産んで居る。死靈觀念についてもマライ人やジャワ人のそれは、印度教回教の觀念であつて梵語やアラビア語で云ひ表はされて居る。ニトやアニトはマラヨポリネシア語だと云はれ、⁽²⁾此觀念は比較的低級なインドネシア人の間に行はれて居るので、此點のみではスマンガト等の靈質と其先後を定めることは出來ない。然しベク、アンヂャ、ブルア、リアウ等の死靈觀念に至つては、その行はれて居る土地及び人種の関係から、明かに地方的に發生したものを認め得るのであつて、インドネシア人一般の固有な民族的觀念とは考へられない。従つて死靈觀念も全體としては靈質觀念ほど一般的な民族的性質を有しないと云ふことが出來やう。

(註)1 Annandale, op. cit., p. 98

2 Wilken, op. cit., III, p. 184

七

次に觀念の内容から眺めて、靈質は最も單純な従つて最も原始的と見える性質を具へて居る。即ち靈質の觀念はインドネシアに於ては、人間のみならず、動植物から礦物人工物に至るまで、普遍共通な靈魂であつて、其間多少強弱程度の差別はあるにしても、性質上一切の存在少くともすべての生物に於て同じ性質を持つて居り従つて彼此互に融通し得るのである。他人のスマンガトを血肉を食つて自己に獲得し、動物礦物の靈質を人に與へ、一の植物より他の植物へこれを移すことは、幾多の儀禮に現はれて居る。之に對して死靈は猛獸、蛇等の數種の動物の外殆んど全く人間に限られた特殊の靈魂であつて、蓋しそれが死後存續の主觀的並に客觀的慾求から發生した觀念であるだけに、人間を中心として考へられた或意味に於て複雑な靈魂觀念である。精氣も亦此點では往々動物にも認められるが、(1)それは氣息の觀念から出たものが多く、殆んど常に人間に關してのみ考へられて居るので、漠然と一切の事物の存在條件または生存力として考へ出された靈質よりも、思想的にむしろ深いものを持つて居る。尤も一方から見ると靈質は一切に共通な靈魂として、極めて抽象的な進んだ觀念のやうにも思はれるが、實はそれは廣い共通性を持つてゐるといふだけで、其内容は甚だ具體的な特殊化されない素朴な觀念に過ぎないのである。

故に人間を本位とする死靈は各個別々の存在を保ち互に個性の相違をもつて居つて、一部分離れて存在することも出来ず、彼此交換することも困難であるが、靈質は普通にはかゝる個體性を有せず、それが屢々生命の液(Lebensflüssigkeit)生命の質(Lebensmaterie)と呼ばれる、如く、單に質量的に考へられ、其一部分或は如何なる分量をも取捨出入し得ることは、トンデイヤガナの轉移の場合に常に認められるのである。(p. 2) 此點では精氣はむしろ靈質と似た性質を持つて居るが、然しこれには事實上靈質の如く移入移植等の儀禮のあることを見ない。蓋しそれは精氣觀念がかゝる原始的な儀禮を生ずるよりも一層發達した時期の產物に屬するが爲めであらう。それで多少組織的な靈質觀念では、人間に於て其身體に於ける部位を定め、頭、心臓等を其住所と認めるが、一般には之を身體に徧在するものと考へ、往々特に血液を其所在とする位である。かの稻のスマンガトを米母、米兒等と稱する代表束に集中させるのも、一は儀禮上の必要からではあるが、全體の稻の靈質をこれに集中し得るのは、其質量的な徧在の思想に基くのである。

次に靈質は一種の生靈たる性質上特に肉體又は物體に常に附着して存在し、睡眠中又は病氣等の場合の外容易にこれから分離しない。たとひそれは分離し得ても

一時的であつて、それが多少個體化されて人格的生靈觀思に轉化せんとして居るものゝ外は、それは身體を離れては其存在の意義を失ふのが本來の性質である。之に反して死靈はまた其性質上當然身體の存在を豫せず、肉體と獨立に存在し得ることが其特徴であつて、たとひ假托憑格等の現象が認められるにしても、それはむしろ特別の場合と見做される。かく靈質と死靈とがそれぞれ所謂體靈と遊魂との性質を基本として有つて居ることは、兩者の著しい差異を示すのであつて、此點からも靈質の方が靈魂觀念として一層單純な思想の上に立つものと云ふことが出来るであらう。

さらに死靈が其自身に意識を有し、時としては特殊の形體を有する人格的な靈魂であるのに對して、靈質が多くは無感覺な形體なき靈と考へられて居ることは、上に幾度か之を説いた。スマンガトが鳥、蝶等の形を以て顯現することは、それが稍人格的生靈の觀念に變化してからのことであつて、たとひ儀禮上の必要から特殊の形體が想定され、何等かの顯現が認められても、それは多くは蜂群等の質量的なものであり、偶然的の説明として生じたものである。これまた死靈の方が性質上さらに發展した靈魂觀念であることを明かにするものであらう。尤もこれらの點では精氣は

死靈よりもむしろ靈質に近い性質を有し、或はさらに單純な靈魂觀念とも見られるが、之を分布の上から見ても、また其生理的靈魂としての特殊な性質から考へても、それが靈質觀念からの分化であることは略々想像される。勿論嚴密に考へて單純な觀念が必ずしも原始的なものとは斷言できないが、以上の諸點を綜合して見て、靈質よりも死靈觀念の方が思想的により多く發達した時期に屬することは、略々推測されるであらう。

(註) 1 Kruijt, op cit, p. 10

2 Warneck, Die Religion der Batak, 1909, p. 121; Wilken, Handleiding voor de vergelijkende volkenkunde van Nederland, durch-Indië, 1893, pp. 619-620

八

なほ此等の觀念の發展を多少論理的に考へて見ると、他の靈魂觀念からは多くは靈質の觀念轉化したので、少くとも靈質のそれよりも稍發展した思想的基礎を豫想するやうに思はれる。人格的生靈の觀念が多くは靈質の轉化であることは、前にも云つたやうにスクマやスマンガトの擬人化に於て顯著に示されて居り、カクドアン、

カト、ボ等は恰も兩者の中間の性質を持つて居て、正に此轉化の過程に在るものと思はれる。而して此個體化及び擬人化の傾向は、それが對人的態度を便宜とする儀禮の對象たる必要と、具體的に物を考へやうとする思索の進展に伴ふのであつて、すべての存在に、共通普遍である質量的な靈質に、まづ其物體の性質による高下強弱等の種別が生じ、夢、病氣、衰弱等の現象の説明から身體との分離が認められ、靈質の呼戻し取押へ (*riang se-nangut*) または引出し (*mengambil semangat*) 等の儀禮が生じて、一層個體的人格的に考へられ、出産の説明の爲に靈質の再歸を認め、之によつて死靈の起源を説明するに至つて、それは益々明瞭に其個性と永續性を具へた靈魂觀念となるのである。精氣觀念が其形式は單純であつても、其根底には一層深い思索の進歩を豫想し靈質の生理的機能の特殊化されたものとして、これから分化したものと見做し得ることは、既に再三之を説いた。

死靈觀念特に其比較的民族的な色彩を持つて居るニト、アニト等の起源については、之を靈質觀念と比して何れを先とも斷言できないが、然し靈質は當面の生命現象を説明する生靈觀念の一種として、最も幼稚な心理にも必要缺くべからざる觀念であり、死靈は死後生活を説明する爲めに發生した觀念として、稍進んだ思索力を要

求するものと云ふことが出来やう。現今のインドチシア人には殆んど死靈觀念を持たないものはなく、死後の存續を信じないものはないと云つていゝ位であるが、然し彼等の死後生活觀念は必ずしも永續的なまた明確なものではないのであつて、現に高等宗教の感化を受けない奥地の原始的なインドチシア人の死後觀念は、單に死後數日間の存續であつたり、酋長其他特殊の人々にのみ可能であつたり、唯だ死の崇りを怖れるが爲めであつたり、其死靈觀念も甚だ曖昧であることは、トラジャ人のアニト、ミナハサ人のエンブン (umpung)、ハルマヘーラのランギ (wong)、バゴボ族のギモクドの觀念などに現はれて居る。(1) 自己又は他人に關して死後の存續を要求することは、極めて單純な幼稚な心理に起り得ることであるが、しかも現實當面の生活の外餘り多くを考へない原始人に於ては、此要求が具體化されない場合は往々にして見出されるのであつて、まして之を説明するが爲めに死靈觀念を發生するに至るのは、單純な現實の生命現象を説明する爲の生靈觀念の發生に比しては、むしろ第二次的のものど云ひ得るであらう。現にバタク人がトンディの觀念を延長して死靈となすことや、ニャオト、スマンガト、スクマ等が死後に殘存して死靈の役目をなして居る場合の如きは、彼等に本來固有の死靈觀念がなかつたのが、死後生活觀念の發展の結

果こゝに死靈として延長されたものと見做すことが出来る。

又人格的生靈の觀念が靈質と並び存する場合に、それは死靈の起源を求めて、之を生前に遡つたものと認め得るのであつて、キャン人のプルアやルンガルンカン其他の事例は多少此想定を實證するのである。然し反對に死靈觀念が生靈觀念の延長であるやうな場合には、それが靈質觀念からの派生轉化であること一層確實となるのであつて、いづれにしても靈質が此等の靈魂觀念の根本的なものであるといふことに歸着する。死靈觀念の極めて原始的なものに至つては、恐らく靈質觀念の轉化といふよりも、これに獨立の起源を認めなければならぬであらうが、此場合に於てもそれが思想上靈質よりも稍後期の發生に屬すると見做すことは、上に述べた理由によつて、必ずしも無理な臆斷とは云はれないであらう。ことに若しリードの云ふやうに、死靈觀念の要素が靈質から成るといふことを許すならば、(2) 靈質觀念が其等の基礎となる最も原始的なものであることは、當然これを認めなければならぬ。

以上インドネシア人の靈魂觀念の種別と關係について、主として地理上の比較と論理的の考察のみを以てしたのでは、靈質觀念が彼等に固有なまた最も原始的なものであることを斷言するに不充分であることは云ふまでもない。たゞ嚴密な意味

の歴史的考察の困難にして此種の資料の多くない民族と其靈魂觀念については、其發生の歴史をたどるのにかゝる方法を以てすることは、又餘儀ないことである。然し精細な研究といふのではなく、たゞ考へつくまゝを書きつゞけたに過ぎないのであるから、其方法と論理の不精確なことについては、切に先覺の吐正を乞はなければならぬ。

(註) 1 Benedict, *A Study of Bngolo Ceremonial, Magic and Myth*, 1906, pp. 49-61; Wilken, *op. cit.*, pp. 212, 253

2 Read, *op. cit.*, pp. 161-162